



2022年 流山憲法集会 5月14日(土)

生涯学習センター

講師 柳澤協二さん
「国内外情勢の中で考える護憲」



防衛官僚として防衛省の政策立案に深くかかわって来た。安倍内閣の安保政策を批判し、集団的自衛権の主張の危険を訴えて全国で講演などを行っています。

英F35地中海で墜落

英海軍の空母「クイーン・エリザベス」(昨年9月に横須賀に寄港した)に搭載されていたF-35BライトニングIIが2021年11月17日(水)、地中海で通常訓練中に墜落した。パイロットは脱出。F-35が全損する墜落事故は5機目。この空母は日本を含む初めてのアジア太平洋地域への任務にあわせF35を英8機、米10機艦載していたという。



米F35も南シナ海に墜落 機体搜索に必死

1月24日米海軍の戦闘機F35Cが南シナ海で訓練中、空母カール・ビンソンに着陸しようとして失敗、海中に飛び込んだ。パイロットは脱出し、ヘリで回収された。F-35の墜落で今回が6機目の全損事故。

この最新テクノロジー満載のF35が海中に沈んだため、米軍は万一中国に先に海中から引き揚げられて秘密を知られては大変と搜索、回収に必死だ。F35はステルス性(レーダーで見えない)を備えた最新鋭の戦闘機として自衛隊に導入、A型B型合わせて147機を購入予定。配備が始まっている。1機100数十億円。B型は垂直離着陸も可能で、小型空母からも発進出来るので、海上自衛隊は護衛艦と称して建造した「いずも」を改造して空母とし、そこにこのF35Bを搭載しようとしている。

日本ではF15が墜落

日本でも1月31日自衛隊のF15戦闘機が小松基地から離陸直後に墜落。乗員の二人は司令の田中1佐などベテラン。

新型コロナウイルス パンデミックの中 途上国で看護師不足

ロイター通信が24日伝えるところによると、「オミクロン株」によって新型コロナウイルス感染が急拡大する中、富裕国が貧困国からの看護師採用の動きを強め、貧困国での看護師不足がますます深刻化していると国際看護師協会(ICN)が警告している。会の最高経営責任者のハワード・キャットン氏はオミクロン株の感染者が激増する中、看護師の疾病や燃え尽き症候群、離職が増え、欠勤率はこの2年間のパンデミック下でも今までにないレベルだという。



欧米諸国は看護師不足を埋めるため、軍の人員やボランティア、退職者の雇用などしているほか、他国からの看護師募集も強化している。「英国やドイツ、カナダ、米国での国をまたいだ看護師募集の増加を間違いなく目にしている」「このようなその場しのぎの解決は、富裕国がその経済力で買い占めたマスクなどの個人用保護具やワクチンの場合と同様、先進国と途上国間の不平等をさらに悪化させる」と警告。ICNによると、パンデミック前ですでに看護師が600万人不足し、その90%近くが低所得国、中低所得国でのものだった。こうした看護師は高賃金やより良い労働条件さらには富裕国が看護師に優先的な在留資格を与えることも、この流れを促進していると指摘している。

キャットン氏は「富裕国は新しい看護師や医療従事者の教育コストを免れている」と強調。さらに、パンデミック収束時には、富裕国でさえ「対処しきれないケア労働の残務の山」に苦しむとし、ケア労働充実への投資を呼び掛けている。富裕国が貧しい地域の医療体制を崩せば、そこからまた世界に広がることになるばかりか、この嵐の後にも膨大なケアの仕事が残るというのだ。

日本で感染急増 第5波中の体制強化怠る

1月末には第6波が全国に拡大し、東京では連日1万数千人。自宅療養中の人、30日時点で6万5000人を超えて過去最多。若者はコロナにかかりにくいと言われていたが、オミクロン株主流になってから20~40代の罹患者が増えている。検査での陽性率も第5波のピークを上回り30%を超えている。患者が減った第5波のうちに検査やワクチン接種の体制強化を訴えていた医療関係者の声を無視して体制作りを怠ったためだとの批判が強まっている。

改めて戦争を考えるために

学生、戦時下の強制労働―「私の学徒勤労員日記」
鈴木光治 (2)

1月11日 戦局、我が国に不利

敵アメリカはルソン島に上陸を開始したそうだ。フィリピンにはおれの従兄も将校としている。彼にもいよいよ活躍できる時がきたのだ。しかし、あのすばらしい特攻の戦果にも拘わらず上陸できたとは信じられないくらいだ。あれだけの軍艦や輸送船をやっつけられてもくたばらなかったとは、どういうことなのだろうか。まったく物のある国だ。決して見くびるわけにはいかないことが、だんだんおれたちにも分かってきた。この戦争の初めに真珠湾で大勝し、マニラ、シンガポールと次々に占領し、南洋の島々を我が軍の指揮におさめただけでなく、アリューシャン列島のアッツ島まで攻略したところは、まったくアメリカは図体がおおきいくせに、たいしたことはないと思った。この戦争は案外早く我が軍の勝利の内に終わるのではないかと思った。ところがガダルカナルが「転進」と公表された。転進とは奇妙などうも気がかりな言葉だが……。その後、アッツ島の我が軍守備隊は大和魂を発揮して全員玉砕してしまった。あゝ北海の孤島に散った英霊の御魂安かれ。さらにマーシャル群島から始まってマリアナ諸島の重要地点サイパン、グアム、テニアンなどを次々にアメリカに取られてしまった。アメリカ本土攻撃の重要な足場であり、我が本土防衛の基地である重要な南洋群島は敵の手にわたり、東京が空襲されることになってしまった。そして遂にフィリピンを攻撃しにきたのである。さあ、苦しい戦局になつてきたぞ。だが何が何でも勝たなければならぬまい。

それにしても我が勇敢なる兵隊さんの活躍にはまったく頭がさがる。彼等の死闘がなかったら、フィリピンはおろか本土にまで上陸されてしまったに違いない。その奮闘の一例が今日の新聞に載っていた。敵の上陸作戦は先ず空と海からの一斉射撃に始まる。飛行機と軍艦が情け容赦なく上陸地点目がけて弾丸をたたきこみ、もう大丈夫という時点になつて初めて上陸させるのが常套手段らしい。どうも臆病者が多いとみえて日本軍のように雨あられと弾丸が飛ぶなかを勇ましく敢行できないのだ。それだけの援護射撃を受けながら、上陸の時にはさらに戦車を先頭にしてその後におっかなびっくり従うというのだから、アメリカ軍というのは情けない奴らである。従軍記者の目撃によると、このようにして上陸した敵兵が次から次へと数を増やし、やがて海岸から道路へとさしかかった戦車に、あっと思う間もなくたこつぽ式壕のなかにかくれていた我が勇士が爆雷を抱いて飛びかかっていった。ごう然たる爆音とものすごい爆風の跡、道路に掘られた黒々とした大きな穴や鉄片を残して戦車も勇士の姿もなかったという。

おれはこの記事を読みながら涙が出てしょうがなかった。それと同時に小さいころよく聞いたノモンハン事変の時の話とまるで同じようだった。満州の国境を境にしてソ連と小ぜり合いをした時、むこうの戦車の前に我が軍の勇敢なる兵隊さんが火炎ビンを持って飛び込んで敵の戦車を粉砕したという話である。この時の話をしてくれた大人が日本軍の勇敢さをさらに完全にするため、得意そうに我が軍の全滅するまで戦ったと語ったとき、おれは何とも言えない感じになった。それでは負けたのではないか。兵隊が鋼鉄に向かって勇敢にも戦いをいどみ若干の損害を与えた。しかし結局鉄にはねとばされてしまった。何だかこの話の背後には不可解なものがある。

北朝鮮 ミサイル7回目 バイデン政権への揺さぶり？

北朝鮮は30日に地対地中長距離弾道ミサイル「火星12」を射撃試験したと発表。通常よりも高い角度で打ち上げるロフテッド軌道で発射し、正確性と安全性などを確認したとしており、すでに実戦配備していることを誇示したものと見られる。

北部から発射され、飛行距離は約800キロ、高度は約2000キロだった。つまり2000km上まで飛んで落ちてくる間に800km飛ぶとい



う山形の軌道を飛んだ。これをもっと低い普通の軌道で発射すれば、その射程は米領グアムに届く約5000キロとされる。北朝鮮による中距離以上のミサイル発射は、2017年11月に大陸間弾道ミサイル(ICBM)「火星15」が発射されて以来、約4年2カ月ぶり。手を変え品を変えて「こんなに多様な攻撃ができる」とアピールしている。

今年に入って7回目の連続発射だ。日本政府は30日、岸田文雄首相や岸信夫防衛相、林芳正外相らが国家安全保障会議(NSC)を首相官邸で開催。岸田首相は「国連安保理決議違反で強く非難し、抗議した」と記者団に語った。キム・ジョンウンも苛立っているが、日米も抗議以外にさしづめ手がない。だが手をこまねいているのではない。間違つて戦争に突入しないためにも本気の外交交渉が求められている。

おおたかの森駅宣伝と署名(毎月9日)

2月9日(水) 15:30~16:30
おおたかの森駅自由通路

~~~~~

**カンパはこちらの郵便振替口座へ**  
**00130-5-464735 口座名 九条の会・流山**